東國丸　淺草橋の船なり、大船のはじめなり、

山一丸　日本橋の船なり、東國丸より後に造る、東國丸より大きなる屋形を八間に云きりし故、山一丸と云ふ、

熊一丸　江戸橋の船なり、屋形を九間に云きりし故に、熊一丸と云、

神田一丸　神田一丸、是は神田にて一番の大船なり、〇略中

川武丸　大屋形船なり、さりながら、此船程のは、いくらもあるゆへ、餘はこと多さに略之、

窮屈丸　此船は、かし船にはあらず、或人の手船なり、或は自樂丸と名付て、小き船なれども、自らは樂しむと云ふ、或は易安丸などゝ名付て、せばき船なれども、膝を入るゝに樂しみありといふ心を以て名付る、此作の同類のみなる中に、窮屈丸と名付けしは、替りたる心なれば、是を記す、

〔東都歳事記二五月〕船遊山〇略中　屋形船は、寶永の頃より時花出で、百艘に極りしとぞ、東國丸といへるを大船の始とし、夫より續て、熊市丸、山市丸あり、熊市は座敷九間に、臺所壹間ある故なり、山市は、座敷八間、臺所一間ありし故の名なり、神田一丸といへるは、神田川にて一番の大船なりしとぞ、

〔玉海〕治承四年三月五日丁巳、巳刻攝政〇藤原基通被向宇縣長者之後初度也〇中略入夜被還也、

宇治儀

宇治川渡之間、依無尋常船、舁居車於無屋形之船渡之、於平等院北面大門下車、

〔東都歳事記二五月〕船遊山　兩國より淺草川を第一とす、花火の夜は、ことに多し、樓船の名は、江戸砂子拾遺に、百艘を擧ぐ、今は次第に減じて、屋根舟本名日よけ舟のみ、年々に多くなれり、

〔享保集成絲綸錄四十二〕正德三巳年五月〇略中

一貳挺立三挺立之日除船、川船方爲御用、員數三拾艘ニ相定、燒印札壹枚充渡置候、此外一切所持